

初代監督として

村田恒太郎

関大レスリング部の創生は、昭和22年に現在のOB会長 山本雅之氏が、当時、関大体育会委員としてレスリング部の創設に着手した事により一頁を印する。

これより先、同氏の出身校である大阪市立高等学校の柔道部では、当時、米軍関係により禁じられていた柔道に代るものとして、いち早くアマチュア・レスリングの導入に着目し、当時の柔道部々長小田原徳善氏が母校明治大学レスリング部に、その指導を呼びかけ、学徒動員より復員して明大レスリング部の復活に努力していた我々がそれに応えて、大阪市立高等学校の合宿指導にあたった。その時の同校の主要メンバーが関大レスリング部創生期の主体を形成していたことになる。

同時に、前記山本氏が当時大阪市立高等学校の一期生の関係で、付ききりで合宿のマネージメントをするかたわら創立へ一步一步前進するために運命的に働いていたのである。

昭和23年

この年、その努力が実って待望の関西大学レスリング部の創立となるわけである。

創立時のメンバーは、宇賀（照夫）、古沢、安川（昭和50年死去）、友田、東条、田中、木村（勝）、青島、それに当の山本などであった。

この年の9月、西宮体育館で行なわれた関西選手権大会に関大の安川がフライ級で第3位に入賞しており、「新人安川の健闘は見るべきものがあり今後が期待される」と評された。この大会には、当時、日本大学大阪専門学校の下村（現木村、ライト級2位）、また押立（フライ級1位）、木村（晴茂）（バンタム級1位）、黒木（バンタム級3位）の大阪市立高校組が大活躍し、後にとともに関大へ入学する。なお、そのうち押立は、この年12月の全日本レスリング選手権大会において、フライ級の2回戦で優勝候補の随一荒井（早大）を破り「称讃ジュニア押立の健闘」と評されている。

この年の国民体育大会は福岡で開催されたが、この時の大阪府代表選手団は関西大学レスリング部が主力をなしていたのである。

昭和24年

この年、宇田、梶原、押立、木村（晴茂）、黒木などが入学し、熱血漢ぶりを発揮する。同じく下村が関大に転学してきて最上級生となり、初代主将となり着々と部の形態を整えていくのである。うぶ声をあげた頃からこの頃の経過は、全員の部創設に対する情熱の一致と云えるであろう。

昭和24年、初代監督に私（村田恒太郎）がその就任を正式に要請され、心からの感激をおぼえてお受けしたわけであったが、それから30年の今日、昨日のことにように想いだされる数々が限りなく去来する。

その頃は、私は、前記小田原部長の招きにより、枚方市へ居を移し、大阪市立高等学校の指導の傍ら当時の関大天六学舎へ出向いて指導に当たった。

それは、前記山本氏の熱烈なすすめによる男の心意気と云ったものを感じると共に、戦後私の母校

明大レスリング部の復興に尽力したことを思いあわせば、創生期の苦労は手にとるように理解できたことが私を奮いたたせたのである。当時の山本氏の努力には心から敬服し尊敬の念を禁じ得なかったことを特記したい。

その後、私の監督活動に便を与えんために、当時関大の後援会役員であった故木村篤一氏（創立メンバーの一人であった木村勝氏のご父堂）の経営する大阪淡水魚具(株)に就職する事を得て、関大レスリング部の指導にご配慮を賜ったことは忘れ難い思い出であった。

創生時の練習

さて、現実の部活動は今にして思えば、後輩諸君が想像できない種々の苦労もあったが、またそれが今日の楽しい思い出として価値あるものであった。

当時は、戦後の物資不足であり、もちろん資金もなく、練習マットの購入もできない苦しい部のスタートであった。

23年の創部当時、道場は千里山学舎の経済学部前の青空道場、芝生の上であったが、我々は黙々と裸で青春をぶつけ合っていたと云ってよかろう。それだけに純粋な気持であったから、何の不足も感じなかったのではなからうか。芝生の道場には小石がまじっている。擦り傷には小石がくいこんでいたものだった。一時、山本君の努力で柔道場等を使用できるようになったり、やりくりの時代であった。

その後、24年になってからマットも調整し、天六学舎の地下教室で練習するようになり、練習場の感がそなわったものの今のようにビニール製のものではなく、目の粗い帆布であるから体中擦り傷のたえまがなく、赤チンをぬった体は遠目には赤鬼のように見えたものであったが、傷の赤チンは、関大レスラーの勲章であり、誇りであった。

当時の私は、戦前（戦中は一時中止）、戦後にわたる全日本フェザー級のチャンピオンであったから、現役のバリバリであって、若さと馬力を若い創立メンバーに惜しみなくぶつけたものであった。

特に初代主将と云う事もあって下村君とは残酷物語と云った練習を繰り返したものであった。彼もよく耐えた。それもこれも後に続く者のためであったが、創生期の力は全員一致して私の暴力的な練習によく応えてくれて、脱落者もなく2年目を迎え、まさに関西大学レスリング部はロケット弾の如くレスリング界に切りこんだものであった。

輝かしい初陣

昭和24年リーグに加盟、関西学生レスリング連盟の春季リーグ戦に**関大⑧**—1同大、**関大⑤**—4関学と2勝して優勝し初陣を輝く初優勝で飾った。これに気をよくしてますます張切った部は、「全国制覇を目指し、張り切るレスリング部」と関西大学新聞に紹介された。

終戦以来種々のスポーツが復活され、その華やかさは我々を面喰わしているが、レスリング部もその一つである。この部は創設以来未だ2年、毎日の猛練習の賜は遂に5月8日西宮での関西大学リーグに初出場、戦後6連覇を誇る関学を5対4の接戦で敗り初優勝の栄冠を獲得し、全日本レスリング界に関西に関大ありと認められるに到った。戦前、既に日本レスリングの技術は世界水準に達していたが、今次大戦に災いされ衰微の一途を辿った。斯くして戦後いち早く関東各大学や関学、同大も復活、次いで本学はやや遅れて一昨年8月、山本他4、5名で発起しその後日々の血涙もしたたる努力の結果、関西に於ける覇者となり得た。現在部員も十数名を教え、目下新進気鋭

の部員を募集して居り、新入部員の中にはフライ級関西選手権保持者押立（大市高）とバンタム級関西選手権者木村（大市高）の他有望なものが多くその活躍が期待されている。

過去に於ける試合経過としては、5月3日京阪神3都市対抗戦に京都・兵庫を各9対0・8対1で決勝、覇権を獲得、又8日の関西リーグ戦は同大を8対1の大差で破り、続く関学を5対4の接戦で破り初優勝の栄冠を担った。又、関西新人戦でも黒木（フェザー級）古沢（フライ級）キャプテン下村（ウェルター級）がそれぞれ優勝、29日関西選手権大会は各級に圧倒的に優勝し（スポーツ欄を参照の事）、来る7月中旬の東西対抗に備えて烈しい練習を続けている。ここでメンバーを紹介しよう。

フライ級 押立、宇賀 バンタム級 木村、安川 フェザー級 黒木、古沢 ライト級 大野、下村
ウェルター級 なし ミドル級 なし

で監督には明大OB、全日本フェザー級選手権保持者の村田恒太郎氏が就任、明大独得の激烈な練習を要求して居られる。扱てレスリングについて簡単に説明しよう、これは一口に云えば、2人の競技者が互に両肩をマットにつけ合うため四肢を完全に動かさず得る全身的スポーツであって、故に非常に鍛錬なされた選手の体はギリシャ芸術に見る如く、その平均せる筋骨の発達、その脈搏相搏つ様は実に男性美の極致とも云うことが出来る。

又、体重によってフライ（52K）バンタム（57）フェザー（62）ライト（67）ウェルター（72）ミドル（76）の6階級に分けられ、各々階級で試合を行うため極めて公平で、負傷する者も非常に少なく、下村主将は学友諸兄の良き理解と援助を希望し、語を継いで、未だ関西は関東に比して一日の長を譲るが関西では各大学の實力伯仲である。関東では6連覇の輝かしき歴史を持つ早大が目立っている。我々は猛練習を重ねて来るヘルシンキ・オリンピックには是非とも本学より日本代表を送りたい。その躍進の踏台としての7月中旬の東西対抗に全力をそそいで覇権を握りたいと言葉少ないが確信の程をもらしていた。

こうして学内の評価も一段と高まったのである。

秋季リーグ戦は、惜しくも関学に1点差で敗けて2位に終わった。

昭和25年

春のリーグ戦は再び奪還した。この時の予想は次の通りであった。

関西学生春季レスリング・リーグ戦は14日午後1時から大阪YMCAで挙行される。果して何校が優勝するか、實力伯仲した関学、関大の優勝争いに興味がかけられる。

メンバーの異動から見て勝敗の予想を試みると、昨年秋の優勝校関学は島津主将を送り出したものの豊富な陣容を持つだけ左程影響なく、中・重量陣に野田、堂本、河村、山崎などの老巧組が健在である以上依然優勝候補の貫録は十分であるが軽量級がいささか寂しい。むしろ選手に異動のなかった関大が軽量級に押立、安川、木村（晴）黒木ら有力なポイント・ゲッターをそろえているのは万誓の強みで新人を混えた関学、軽量陣を緒戦において一挙に粉碎、余勢をかって闘将下村、大野が強い関学の重量級に喰込んで得点6対3あるいは5対4で雪辱をとげようと虎視たんたんとしている。

結局勝敗の分岐点は関学軽量級の活躍如何にかかっており、このクラスで土井、中野のいずれかが1点をかせがぬ限り連勝の望みはうすく、さもなくば最初に敗るであろう、失点による精神的動揺で思わぬ破綻をまねかぬともかぎらないから関大がやや優勢だ。

一方、同大はフライ級に松井（鈴蘭台高）ライト級に関大から転じた安藤で一応メンバーに充実さを見せてはいるがやはり持駒の少いのと確実なポイントマンがおらぬだけ争覇圏外にある。（山村）

戦後、第1回の日米対抗が甲子園球場で7月に行なわれ、日本代表にフライ級押立、フェザー級に私（村田）、ライト級下村が選抜された。私はこれを期に現役を去ったが、部に対しては相変わらず調子を落さず猛練習を続けた。その後、ほとんど自主的に練習スケジュールを継続して、新主将は次々とこれを踏習して創生期の伝統を受けつぎ、監督としての労もだんだん省ける様になってきた。

この年の全日本選手権大会には、フライ級の押立が3位に、ライト級下村が5位に入賞し将来を囑望された。特に押立は先の日米対抗にも勝っているのでおさらであった。

昭和26年

関西大学学報によれば、春のリーグ戦に対しての観測は、「バンタムの押立、ライトの下村が健在であり、フライに安川あり……戦績が期待されている」ということであったが、昨秋に続いてまたもや関学に苦敗を喫し2位に甘んじた。

秋には、挽回をと臨んだがこれまた関学に⑥—3 関大と負けて2位に甘んじた。

しかし、個人戦においては関西選手権大会でフライ級で押立が1位、全日本選手権大会でライト級下村が第3位に入賞、また全日本学生選手権大会では、フライ級押立3位、ライト級下村2位と活躍した。

昭和27年

春季リーグ戦、まだ関大の不調が続き、関学に負けて4シーズン連続2位に甘んじなければならなかった。

秋季リーグ戦は、関学の連勝をストップすべく全力をあげて5シーズン振りに王座に帰りをさいた。成績は関大⑦—2 同大、関大⑥—3 関学であった。

個人戦においては、関西選手権大会では関大勢が大活躍で、フライ級安川1位、バンタム級押立1位、ライト級清谷（兄）2位、ウェルター級清谷（弟）1位、ミドル級梶原（OB）1位、同古沢2位であった。全日本学生選手権大会には惜しくも押立が明治の橋本に敗れて2位に終わった。

昭和28年

初陣の初優勝、努力の結実しなかつたくやしさをかみしめた4連敗、この過程で部のあり方を各自種々と考えるに至ったのであろう。こうして関大レスリング部の基礎が漸く固まってきたものと云ってよかろう。

石の上にも3年と云うが、本当に今思えば全員一致良く頑張ったと云う感慨で一杯である。

そんな時、現関大レスリング部OB会名誉会長 松井清氏との出逢いがあった。戦前の闘将であり、生粋の関大OBである同氏が、遠くから私の指導方針を温かく見守って下さったことに敬意を表する次第であります。

この春のリーグ戦は連覇を目指して、「関大、関学は伯仲」をふっとばし王座を不動にする意欲に燃えていた。

28年度関西学生レスリング秋季リーグ戦は19日正午から関大、関学、同大の3大学を集め神戸YMCAで行われる。春季リーグで2季連続優勝した関大がやはり好調で3連勝が予想されているが、これを追う関学もこれまでの大きなアナとみられていた軽量級が最近著しい成長をみせたのでかなりの波乱を招くだろう。関大は今春、押立以下主力選手のほとんどを卒業させたが、伝統的なねばり強さと大川、横山（フライ級）佐々木（バンタム級）ら新人に、有力ポイントゲッターである清谷兄弟（ライト級）がそろって好調だ。

関学は田村（バンタム級）小寺（フェザー級）三ヶ尻（ライト級）大崎（ウェルター級）らリーグ戦のベテランが揃っていながらフライ、バンタム両級の手薄でこれまで事実上の優勝戦であった対関大戦でもマッチポイントである5勝が獲得出来ず苦杯をなめてきた。しかし今秋は全日本学生で活躍した川崎（フライ級）また清水（フライ級）山田（フェザー級）らが最近めざましい実力向上を示しているから対関大戦でもフライ級で先勝出来れば試合は関学に幸いなものになるのではないか。

同大は岩野、田島(フェザー級)が光っているが、相変わらず陣容が不備で今秋もテールエンドから抜けきれまい。

関大⑦—2同大、関学⑥—3同大、関大⑨—3関学の結果で見事初の連勝を果たした。

秋には勢いに乗じて3連覇を狙ったが惜しくも関学に敗れて2位に甘んじた。

この年、OBもまじえて関西選手権大会には大活躍で、フライ級横山2位、バンタム級押立(OB)1位、ライト級清谷(兄)1位、ウェルター級清谷(弟)2位、ミドル級下村(OB)1位であった。また、この年の国体ではフライ級に安川(OB)が第3位の健闘ぶりを発揮した。加えて清谷(兄)が全日本学生選手権大会でライト級の3位にも入賞したのである。

さて、関大は本物になった。この頃私は仕事の関係で東京に帰ることがきまった。そうして監督就任の順序を違えてしまったが、戦後の混乱期でもあったのでおゆるしを請うとして、前記の松井清氏にこの機に関西大学レスリング部の二代目監督をお願い申しあげることになった。

幾多の思い出を残しながら、昭和29年3月、前記関大レスリング部後援会会長 故木村篤一氏並びにOB諸氏、部員一同より盛大な歓送会が道頓堀の「いろは」で開催され私は東京へ去った。

今尚、当時贈られた記念品の置時計は時を刻み、関西大学レスリング部の足音が次代、次代へと堅実に時を刻んで行くように思われる。関西大学レスリング部が限りなく前進することを祈って創生期の報告と想いでこのよすがとする。

関西大学レスリング部元監督

東京都アマチュアレスリング協会副会長

(財)日本アマチュアレスリング協会理事

明治大学レスリング部元監督

明治大学レスリング部OB会会長